

深淵の倫理
－後期ハイデガーと後期ウィトゲンシュタイン－

後藤雄太
北海道情報大学

Ethics of an Abyss
－Heidegger's and Wittgenstein's Later Philosophies－

Yuta GOTO
Hokkaido Information University

平成24年11月

北海道情報大学紀要 第24巻 第1号別刷

〈論 文〉

深淵の倫理 ——後期ハイデガーと後期ウィトゲンシュタイン——

後藤 雄太*

Ethics of an Abyss —Heidegger's and Wittgenstein's Later Philosophies—

Yuta GOTO

【要旨】現代とは、「なぜ」という問いに対する答え、すなわち根拠が欠けているニヒリズムの時代、神なき時代である。このニヒリズムは、倫理的問題にも密接な関係を持っている。そもそも、応用倫理学が取り扱うような現代的諸問題は、現代人が生や倫理の根拠を失っているがゆえに、問題として現れているのである。本稿では、神や根拠を欠いた時代における倫理の基盤について考察を試みる。その際、20世紀における2人の思索の巨匠、ハイデガーとウィトゲンシュタインの後期思想、とりわけ彼らの根拠論を参照することによって、この課題を遂行したい。ハイデガーとウィトゲンシュタインは、理性による究極的根拠付けの可能性を認めないにもかかわらず、ニヒリズムに陥るわけではない。むしろ、彼らはその後期思想において、この世界の存在を肯定し、祝福している。彼らの倫理の基盤は、深淵(Abgrund)としての存在の感覚であって、正当化のための理論的根拠ではない。深淵としての根拠すなわち存在の近みに住まうことこそ、ニヒリズムの時代における倫理の出発点である。

【キーワード】ハイデガー、ウィトゲンシュタイン、倫理、根拠、ニヒリズム

【Abstract】 Our day is an age of nihilism, or a godless age when there is no answer to the question “why”, namely; we have no grounds. This nihilism is closely connected with ethical problems. After all, it is precisely because man in the present age has no grounds for his/her life or morality, that modern problems (which applied ethics deals with) appear. This paper aims to investigate the basis of ethics in an age of nihilism, or a godless age. In so doing, it refers to two masters of thinking in the twentieth century, that is, Heidegger's and Wittgenstein's later philosophies, especially their theories of grounds. According to Heidegger and Wittgenstein, it is not possible to arrive at the ultimate ground through human reason. Nevertheless, they never fall into nihilism. They rather are positive

* 北海道情報大学 経営情報学部 医療情報学科 准教授

Associate Professor ;Department of Medical Management and Informatics, Faculty of Business Administration and Information Science

about being of this world, and bless it in their later philosophies. The basis of their ethics is “a sense of being as an abyss(Abgrund)”, as opposed to a theoretical warrant for justification. Living near the abyss as a ground, i.e. being, is the starting point of ethics in an age of nihilism.

序

ニヒリズム。すなわち、目標が欠けていること。「なぜ」(warum)という問いに対する答えが欠けていること。ニヒリズムとは何を意味するのか。——最高の諸価値が無価値になってしまうということ。¹

この19世紀末に発せられたニーチェの言葉を引き合いに出すまでもなく、現代とは、「なぜ」という問いに対する答え、すなわち「根拠」が欠けているニヒリズムの時代であり、神なき時代である²。こうした時代風潮は、現代哲学の動向にも影を落としてきた。たとえばポストモダニズム、クワインのホーリズム、クーンのパラダイム論、アルバートの「ミュンヒハウゼンのトリレンマ」、ローティのプラグマティズム等は、西洋哲学における根拠づけ(基礎づけ)主義の破綻を、それぞれの仕方で示すものであった。

ニヒリズムは、当然のことながら倫理的問題にも無関係な現象ではなかった。倫理学においても、たとえば1950年代から60年代にかけて英米圏のメタ倫理学で取り上げられるようになったWhy be moral問題に見られるように、あらためて倫理の根拠が問いただされざるを得なくなっている。また、近年、応用倫理学で取り扱われているような現実的諸問題の存在が示しているように、「現実世界における倫理の崩壊と構築」が焦眉の課題となっている。

以上のような現状認識のもと、本稿では、ハイデガーとウィトゲンシュタイン、彼ら20世紀哲学を代表する巨匠それぞれの後期思想、とりわけ根拠論へと立ち返り、それらの共通点を浮かび上がらせながら³、根拠なき時代、神なき時代における私たちの倫理の在りようを考える手がかりを求めたい。

——それにしても、なぜハイデガーとウィトゲンシュタインなのか？ 彼らの後期思想においてはともに、理性による究極的根拠づけの不可能性が認められているが、それにもかかわらず——いや、だからこそ——倫理はなおも可能であり、豊かな内実を持ちうることもまた示されているように思われるからである。

¹ F. Nietzsche, *Nachgelassene Fragmente Herbst 1887 bis März 1888*(Nietzsche Werke, Historisch-kritische Ausgabe (CD-ROM), Walter de Gruyter, 1994), 9[35].

² もちろんその一方で、人権、自由、科学的真理といった「神の代替物」が、相変わらず少なからぬ人々の信仰の対象となっている。

³ ハイデガー哲学とウィトゲンシュタイン哲学の比較研究史に関しては、T. Rentsch, *Heidegger und Wittgenstein*, Klett-Cotta, 2003, S.9-79を参照。

1. 後期ハイデガーにおける根拠論

まずは、後期ハイデガーにおける根拠論を概観することから始めたい（本稿では、『存在と時間』における思想からの変貌が明確に見うけられるようになる 1930 年代半ば以降を「後期」とする）。ハイデガーは言う。

存在はもつとも信頼されたものであり、決して私たちが不安な疑いに導くことはない。あれこれの存在者が存在するのか、それとも存在しないのかを私たちが疑うことは時々あるし、あれこれの存在者がどのようにあるかを思案することはしばしばである。しかし存在は、それなしには、私たちは存在者を何らかの見地から疑うことさえできないがゆえに、どこにもそれ以上の信頼性を見ないほどの信頼を与えている。
(NII.S.225)⁴

私たちは、懐疑論者のように、理屈のうえではあらゆる物事に疑いの目を向けることができる。しかし、実際のところ、その疑いという振る舞いそれ自体は、すでに一定の条件を前提として可能になっている。ハイデガーによれば、その前提こそが「存在」である。存在は「なぜ」(warum)と根拠を問うという人間の振る舞いそれ自体を可能にしているような基底であり、存在こそが、根拠づけという企てばかりでなく、およそあらゆる存在者との交渉を可能にしているのである。こうした存在の基底的性格を、存在者と出会うことを可能にする場という意味で、後期ハイデガーは「開け」(Offenheit)や「明るみ」(Lichtung)といったタームで表現するわけである。

しかし、私たちが注意しなければならないのは、当然のことながら、ハイデガーの言う存在とは、西洋哲学が古来求めてやまなかった「根拠」ではないということである。確かに、知や行為等のあらゆる営みを可能にしているという意味においては、存在こそは根拠的な性質を持つとは言える。しかし、ハイデガーの言う存在は、存在者を在らしめ存在者との交渉を可能にする場を与えるだけで、西洋哲学が伝統的に求めてきた「確実な知としての真理」を保証する根拠を与えるわけではない。先の引用の続きは、こうである。

しかしそれにもかかわらず——存在は、存在者のようには根拠と基盤を私たちに与えてくれない。私たちは、存在者には向かうことができるし、存在者なら当てにできるし、存在者なら支えにすることができる。存在は、このような根拠づけの役割に対する拒絶(Ab-sage)であり、一切の根拠的なものを拒否する。それは脱-根拠的(ab-grundig

⁴ ハイデガーの著作からの引用に関しては、下記の略号を用い、頁数を記す。

BH: *Brief über den >>Humanismus<<* (Wegmarken, Gesamtausgabe, Bd.9, Vittorio Klostermann, 1976).

BP: *Beiträge zur Philosophie*(Gesamtausgabe, Bd.65, Vittorio Klostermann, 1994).

H: *Heraklit*(Gesamtausgabe, Bd.55, Vittorio Klostermann, 1987).

NII: *Nietzsche II*(Gesamtausgabe, Bd.6.2, Vittorio Klostermann, 1997).

SG: *Der Satz vom Grund*, Neske, 1957.

WG: *Vom Wesen des Grundes* (Wegmarken, Gesamtausgabe, Bd.9, Vittorio Klostermann, 1976).

深-淵的)なのである。(NII.S.225)

存在のこうした脱-根拠的すなわち深-淵的性格は、1955年/56年の講義「根拠律」の最終部分において、ヘラクレイトスの断片52「アイオーンは、戯れに盤ゲームで遊ぶ子どもだ。王位は子どものものである」を引き合いに、〈遊び〉(Spiel)というメタファーでもって論及されている。

なぜ(warum)、ヘラクレイトスによってアイオーンと見なされた世界遊戯の大きな子どもは遊ぶのか？ 遊ぶゆえに(weil)遊ぶのである。/この〈ゆえに〉(weil)は遊びの中にのみこんでいる。遊びは〈なぜ〉(warum)なしに在る。遊ぶ間は(dieweil)遊ぶ。遊びはただ(nur)遊びであり続ける。すなわち最高で最深のものなのである。/そして、この〈ただ〉(nur)がすべてであり、一なるものであり、唯一のものである。/いかなるものも根拠なしに存在しない。存在と根拠：同一。存在は根拠づけるものとして根拠を持たず、あの遊びの深-淵(Ab-Grund 脱-根拠)として遊ぶ。その遊びは、歴史的運命(Geschick)として私たちに存在と根拠をこっそりと手渡す(zuspielen)。 (SG.S.188)

ここでハイデガーが〈遊び〉というメタファーに託して語っている内容は、おおよそ以下のようなことだ——存在はなぜ(warum)なしに在る。在るがゆえに(weil)在る。すなわち、ただ(nur)在る。存在は、あらゆる存在者を明るみにもたらし、互いの交渉を可能にしている。その意味において、あらゆる存在者は存在という根拠を持つ(「存在と根拠：同一」)。しかし、根拠である存在それ自体はさらなる根拠を持たない、すなわち深-淵(Ab-Grund 脱-根拠)である。以上の内容を十分に理解するためには、ハイデガーが、講義「根拠律」においてシレジウスの詩編——「薔薇はなぜ(warum)なしに在る。薔薇は咲くゆえに(weil)、咲く/薔薇はみずからを気にかけない、ひとが見ているかどうか問題にしない」(『ケルビムのごとき旅人』第1章289)——に即しつつ根拠を二つに区別していることに注意せねばならない(vgl.SG.S.70)。ハイデガーによれば、この詩編では「なぜ」(warum)としての根拠と「ゆえに」(weil)としての根拠という二つの根拠が語られている。

まず、「なぜ」としての根拠とは、存在者に対して、人間主体の側から問われ、探求されるような根拠である。この根拠は、西洋哲学史においては、シレジウスと同時代の人であるライプニッツの「充足根拠律」において初めて明確に自覚されたものであり、以来、それが哲学的・科学的認識の原理ひいては存在者についての認識の原理となっている。ハイデガーによれば、充足根拠律は「根拠の与え返し」(rationem reddere)という点に大きな特徴を持っている。すべての存在者は、表象主体である人間に根拠を与え返し、算定しうる「対象」として確定されるときにのみ、存在するものとして妥当する(vgl.SG.S.196)。これが、ライプニッツにおける「いかなるものも根拠なしには存在しない」という命題の意味である。この命題は、存在者を「理性的(根拠的)動物」(animal rationale)である人間による理解と利用の体系へと組み込むということを含意する。ハイデガーの存在史観に従えば、

充足根拠律は、デカルト哲学を典型とする近代の「主体性の形而上学」の主要傾向を担い、現代科学技術による地球支配を準備したものにほかならないのである。

こうした「なぜ」としての根拠に対して、「ゆえに」としての根拠とは、人間主体による「なぜ」という探求的な根拠づけがそれに対してはもはや拒否され、跳ね返されるような深-淵的=脱-根拠的な根拠であり、存在の側からもたらされる根拠である。薔薇は、自らが咲くこと、存在することに対して、自分で根拠づけしたり、人間によって根拠づけされる必要など全くない（「薔薇はみずからを気にかけない、ひとが見ているかどうかも問題にしない」）。「なぜ」としての根拠が妥当するのは、科学においてそうであるように、薔薇という存在者を単なる表象作用の対象へと貶める限りにおいてである。薔薇は、その存在の側から受け取られた場合、人間による根拠づけなど届き得ないところで、自ずから咲く<ゆえに>咲く。ただ(nur)咲く。そして、この薔薇が咲くということを例として示されているように、あらゆる存在者にとって、まさに存在こそが「ゆえに」としての根拠である。ハイデガーによれば、「いかなるものも根拠なしには存在しない」という命題は、存在者に関する命題としてではなく「存在のことば」(Sage des Seins)として聴き取られる場合、実は、「すべての存在者は存在という根拠を持つ」ということを意味するのである。

存在(ピュシス)とは、「なぜ」としての根拠なしに「それ自身-から-こちらへ立ち現れるということ」(Von-sich-her-Aufgehen)(SG.S.113)である。存在は、「ゆえに」という根拠として、「なぜ」という根拠づけの企てそれ自体をも含む、あらゆる存在者との交渉を可能にしているものであり、その意味で「なぜ」という根拠づけ以前のものである。根拠づけを可能にしている根拠それ自体を外部からさらに根拠づけることは不可能であり、その根拠づけは無効にされ、拒まれる。存在は「ゆえに」としての根拠ではあるが、それ自体は根拠を持たないのである。こうした事態を、ハイデガーは、ヘラクレイトスの断片 123 「自然(ピュシス)は隠れることを好む」を引き合いに出しつつ、存在は、明るみとして存在者の中に立ち現れる一方で、自己を脱去(Entzug)、覆蔽(Verbergung)、外留(Ausbleiben)すると説く。すなわち、存在は、存在者との交渉を可能にする場を開け広げる一方で、それ自体は人間の表象からは脱け去るのである。

ここで注意しなくてはならないことは、存在は人間の表象によって把握されないからといって、伝統的形而上学が説くような背後世界的・超越的なものを意味するのではないということである。ハイデガーは、存在という何らかの「存在者」が、実体的に独立自存して、人間の表象圏を超えたどこか彼方にあると言っているのではない。

存在は、どこかにそれ自体として隔離されて存在し、その上でさらに外に留まっている(ausbleiben)というのではない。存在そのものの外留が、そのまま存在そのものなのである。外留のなかに存在そのものは自らをもって身を覆い隠している。わが身とびったりひとつになっているこのヴェール——まさにそのようなヴェールとして存在そのものは現成している——が、存在そのものとしての無である。(NII.S.319)

存在の外留、脱去、覆蔵はあくまで存在そのものの根本動向であり、存在そのものには、そもそも外留以外の在り方、すなわち表象されるという在り方などない。存在は、私たちの日常的な存在者との交渉のうちに、外留するという仕方、隠れるという仕方、無という仕方、すでにこの上なく透明に現成しているのである。よって、「存在が隠れる」といっても、存在者に関わる次元での「隠れ」を意味しない。存在者ならば、表象主体の前に現われたり、隠れたりもできよう。しかし存在そのものは、隠れるという仕方だけがそのまま唯一の現われ方なのである。

存在そのものは決して、事物や対象のように把握できない。それは、存在が人間にとってまだあまりに遠くにあるからではなく、すでにあまりに近くに到来しているからである。(H.S.293)

私たちはすでに存在と隔絶なく間近に出会ってしまっている。疑う必要もないし、殊更に知ろうと意志する必要もないほどに、である。存在はあまりにも近くに到来しており、非主題的・匿名的であるがゆえに、それを外部から対象的に把握しようとしても不可能である。表象を可能にしている存在それ自体は、決して表象されない。むしろ表象されないからこそ、私たちのあらゆる営みを円滑に進めることを可能にしてくれる「地」となっているのである。もし、表象を可能にしているものが表象されるようならば、さらにそれを可能にするものが要請され、無限後退に陥ってしまい、「地」として、根拠として、機能しなくなってしまうことだろう。

ここには、いわゆる〈近さの遠さ〉(Ferne der Nähe)がある。後期ハイデガーにおける思索の営みとは、存在の遠さを理性主体の力によって探求的に、強引に近づけるのではなく、その遠さのままに踏みとどまり、控えめに見守り、聴従するという仕方、逆説的に存在の近さに出会い直す営みであったと言えよう。

2. 後期ウイトゲンシュタインと後期ハイデガーの交錯点 —— 根拠をめぐって

前節では後期ハイデガーにおける根拠論を概観してきたが、以下では、それを後期ウイトゲンシュタインにおける確実性に関する思索と重ね合わせていくことによって、両者の共通点を抽出することを試みたい(なお、本稿では、『論考』の思想からの明らかな変貌が見られる1930年代前半以降を「後期」とする)。哲学的背景や論述スタイルは全く異なる両者であるが、それぞれの後期思想において至った境涯には、不思議な共通点——それはおそらくは20世紀哲学におけるひとつの到達点であり、私たちの思索の足がかりにもなる——が見受けられるのである。共通点が特に顕著に見られるのが根拠論である。

まず最初に指摘すべき共通点は、私たちのあらゆる営みの根拠——ハイデガーの場合は「存在」——それ自体は根拠を持たない、すなわち無根拠である、という洞察である。『確実性について』においてウイトゲンシュタインは、私たちの営みの根拠を、「信念」や「行動様式」等といった一連のタームで言い当てようとしているが、それら自体はもはや根拠

を持たないということを、至る所で強調している。

根拠づけられた信念の根拠には、根拠づけられていない信念がある。(ÜG.253)⁵

私はなぜ (warum) 、イスから立ち上がろうとするとき、自分にまだ両足があるかどうかを確かめようとししないのか。なぜ (warum) はない。ただ(einfach)そうしないだけのことである。私はそのように行為するのだ。(ÜG.148)

こうした根拠なき根拠、「なぜ」なき根拠の認識は、その根拠と内的に結合している「言語ゲーム」の無根拠性の自覚へとそのままつながっている。

言語ゲーム(Sprachspiel)はいわば予見不可能なものであるということを、君は心にとめておかねばならない。私の言わんとするところはこうである。それは根拠づけられていない。それは理性的ではない(また非理性的でもない)。

それはそこに存在する——私たちの生と同じように。(ÜG.559)

言語ゲームは、根拠なき世界像や行動様式をその基底とするがゆえに、究極的には根拠を持たない。「なぜ」としての根拠を欠いている。「なぜ」それがそこに存在するのか説明できない。それゆえ、言語ゲームは予見できない。また、言語ゲームは、理性・非理性を可能にする根拠なので、それ自体は理性的でも非理性的でもない。

後期ウィトゲンシュタインが根源的現象を言語ゲームとして表現する際、後期ハイデガーと同じように、奇しくも<遊び>(Spiel)というメタファーを用いていることに注目しておきたい。彼らの後期思想において、このメタファーが共通に表していることは、「遊びに根拠(理由)がないように、存在や言語ゲームという根源的現象それ自体は、最早その外部の何らかの根拠によって根拠づけられているわけではない」ということである。もちろんウィトゲンシュタインの場合、Spiel のメタファーが導入された当初(1930年代の初頭)における主なねらいは、言語を「計算」に喩えた場合と同様、「言語とは規則に基づいた活動である」ということを効果的に示すことにあった。しかし、『探求』における「規則」についての徹底した思索を経て、言語ゲームの無根拠性の自覚へ到達することによって、計らずも Spiel のメタファーは、導入当初よりもさらに深い哲学的含蓄を獲得するに

⁵ ウィトゲンシュタインの著作からの引用に関しては、下記の略号を用いる。また、PU と ÜG からの引用の際には節の番号を記し、その他の著作からの引用の際には頁数を記す。

D: *Denkbewegungen. Tagebücher 1930-1932, 1936-1937*. Hrsg. von Ilse Somavilla, Haymon Verlag, 1997.

LE: *A Lecture on Ethics, Philosophical Review*, vol.74, 1965.

PR: *Personal Recollections*, edited by Rush Rhees, Basil Blackerll, 1981.

PU: *Philosophische Untersuchungen*(Werkausgabe, Bd.1, Suhrkamp, 1984).

ÜG: *Über Gewißheit*(Werkausgabe, Bd.8, Suhrkamp, 1984).

VB: *Vermischte Bemerkungen*(Werkausgabe, Bd.8, Suhrkamp, 1984).

WW: *Wittgenstein und der Wiener Kreis*(Werkausgabe, Bd.3, Suhrkamp, 1984).

至るのである。

ウィトゲンシュタインにおける根拠への問いも、ハイデガーと同じく、根拠なき根拠、すなわち<深淵>へと至ったと言える。それは、「疑う」という営み、「なぜ」と問う営みすらも可能にしているという意味においては、根拠であると言える (vgl. ÜG.115, 341, 354, 458, 519)。しかし、それは当然、伝統的な意味における根拠ではありえない。後期ウィトゲンシュタインと後期ハイデガーの根拠論の共通点として重要なのは、近代哲学が前提としているような「確実性の根拠は、人間の意識や理性にある」という発想——ハイデガーの言葉で表現すれば「主体性の形而上学」——を放棄しているという点である。

私は一定の思考過程を経て、意識的にその確信に到達したのではない。当の確信は、殊更に取り上げるのが不可能なほど、私の営む問いと答えのすべてのうちに深く根を下ろしているのだ。(ÜG.103)

私の世界像は、私はその正しさを納得したから私のものになったわけではない。私が現にその正しさを確信しているという理由で、それが私の世界像であるわけでもない。これは伝統として受け継いだ背景であり、私が真と偽を区別するのもこれに拠ってのことなのだ。(ÜG.94)

世界像や行動様式といった根源的現象は、私たちの知の営みの基盤でありながら、それ自体は「なぜ」という探求的問いをもはや受け付けられないものであり、表象主体に「与え返される」ような根拠ではない。デカルト的な確実性が、理性による懐疑の果てに「疑いえない」ことをもって証されるのに対して、ウィトゲンシュタインにおける確実性は、端的に「疑わない」がゆえに、「ただ疑わない」がゆえに、確実なのである。

さらに、ウィトゲンシュタインは規約主義的な主張をしているわけでもない。

「ということは、何が正しく何が間違っているかを決めるのは人間の一致だということか」——正しい、間違っている、というのは人間の話すことであり、人間は言葉において一致している。この一致は意見の一致ではなく、生活形式の一致である。(PU.241)

「生活形式の一致」は、そもそも人間主体による理性的な合議や合意それ自体を可能にする根拠となっている根源的な一致である。このように、後期ウィトゲンシュタインは、根拠を理性的（根拠的）人間のうちに求めることを拒否している——ハイデガーもウィトゲンシュタインも、根拠を、認識主体における静的な「視覚」や超歴史的な審級等ではなく、ピュシスとしての存在、存在の運命としての歴史や、言語ゲーム、世界像、生活形式、行動様式、自然誌といった、<動態>に見出しているのである。

私たちは、「なぜ」なき Spiel を根源的現象として、すでに生きてしまっている。にもかかわらず、様々な説明や果てしない根拠づけを求めてしまう。「私たちの誤りは、事実

を<根源的現象>と見るべきところで、つまりこのような言語ゲームが行われていると言
うべきところで、説明を探し求めることである」(PU.654)。

ウィトゲンシュタインにとって、私たちのあらゆる営みの根拠は、もはや説明され得な
いもの・対象化され得ないものであり、それは疑われることなく、殊更に知られることも
なく、端的に生きられているものであった。だからこそ、それは根拠として機能している
のである。私たちは、根底をなすものに対して、いわば盲目でなければならない。こうし
た事態をハイデガー的に表現すれば、言語ゲームは自己を隠すことによるのみ現れるの
である。この言語ゲームの自己隠蔽こそ、ウィトゲンシュタインの後期思想における「語
り得ぬもの」であると言えよう。すなわち、『論考』においては言語の限界として二元論
的に外部へと求められた「語り得ぬもの」は、後期思想にいたって、語ること、生きるこ
とそれ自体の内に、いわば蔵されるようになったのである。

1941年に書きつけられた以下の断章は、ウィトゲンシュタインの後期思想特有の体質の
ごときものが率直に表れていて興味深い。

いつもいつも「なぜ」(warum)と問う人というのは、旅行案内書を手にして、ある建
物のまえに立ち、成立の事情などを読むのに忙しくて、建物を見るのを忘れてしまう
旅行者に似ている。(VB.S.506)

「なぜ」という根拠づけの問いに心奪われている理性的(根拠的)人間は、建物の近くに
いるにもかかわらず、その建物の存在そのものを見ることがない。ウィトゲンシュタイン
は、私たちの最も近くにあるもの、すなわち根源的現象はかえって見失われやすいという
事実を示唆しているのである。——「私の目の前にあるものを見るということの、私には
何と難しいことよ！」(VB.S.504)。ここにもまた、ハイデガー哲学との共通点を見出すこ
とができるだろう。<近さの遠さ>と呼ばれる、それとの共通性である。

私たちにとって、物事の一番大切なアスペクトは、単純で日常的であるために、隠れ
ている(それに気づかないのは、それがいつも目の前にあるからだ)。(PU.129)

周知のように、後期ウィトゲンシュタインは伝統的な哲学を「病」に喩えている(「哲
学者とは、常識の考えに至り得るためには、多くの知性の病を癒さねばならない人である」
(VB.S.512)。「誰の目にも見えていることを、神よ、哲学者に分からせたまえ」(VB.S.539))。
この「哲学という病」すなわち説明や根拠づけを果てしなく求める病は、最も近きもの
を見失うことから生じるのである。そして、こうした伝統的哲学に対する見解もまた、ハ
イデガーのそれに共通するものがある。すなわち、ハイデガーにおいては、私たちに最も
近い存在の忘却こそが、西洋における哲学=形而上学の始元にあると考えられ、批判の対象
となっているのである。すでに多くの研究者が指摘しているところの、いわゆる「反哲学」
の傾向、すなわち伝統的な西洋哲学とは決別しようとする傾向が、両者に見出されるので

ある⁶。ウィトゲンシュタインはこう書き残している。「もし私の名が死後も生き続けるなら、それは偉大な西洋哲学の終点としてのみである」(D.S.64)。

3. <深淵>と倫理 ——日常への帰郷

以上確認してきたように、ハイデガーもウィトゲンシュタインも、根源的事象に対する理性による根拠づけの可能性を認めない。彼らにとって、「なぜ」という問いへの答えは、究極的には存在しないのである。にもかかわらず、彼らはニヒリズムに陥るわけではない。むしろ、彼らの後期思想の根底にあるのは、この日常世界の存在を、<深淵>なるもの、語り得ぬものとして肯定し、祝福する態度である。そして、彼らの倫理を支えているのは、こうした存在感⁷であって、理論的な正当化のための根拠、「なぜ」としての根拠ではない。彼らはもちろん狭義の「倫理学」の専門家ではなかったが、その根拠論、ひいてはその後期思想全体が、この「神なき時代」「根拠なき時代」においても倫理はなおも可能であること、さらには、倫理が理性主体によって定められた単なるルールやガイドラインにやせ細ってしまっている現代にあってもっと豊かな内実を持ちうるということを示唆してくれているように思われる。

ハイデガーとウィトゲンシュタインにおける後期思想への移行の歩みに共通するのは、

⁶ ハイデガーとウィトゲンシュタインの思索は、「反哲学」であると同時に「反宗教」でもある。すなわち、伝統的宗教に囚われず、ドグマ化・組織化されない形で、この「神なき時代」における聖性の復権の可能性を示してくれているのが、彼らの思想における重要な共通点である。たとえばハイデガーは、以下のように述べている。「すべての従来『祭式』と『教会』は、そしてそもそもそういった類のものは、存在の真中における神と人間との遭遇を本質的な仕方では用意することができない」(BP.S.416)。一方、ウィトゲンシュタインも弟子ドゥルーリーに対して以下のように述べている。「未来の宗教は如何なる司祭や牧師もいない宗教になるであろう。私の考えでは、君と僕が学ぶべきことの一つは、私たちは教会に所属しているという安らぎなしに生きねばならない、ということである」(PR.p.129)。彼らの思索における宗教的要素を、西洋哲学史においては伏流にとどまっていた神秘思想が、20世紀哲学のメインストリームのなかに新たな生命を持って蘇ったものとして位置づけることも可能かもしれない。たとえば以下のようなマイスター・エックハルトによる「なぜなき生」の教説は、ハイデガーとウィトゲンシュタインの後期哲学に共通して見いだせるような思想的要素を有している。「誰かが生命に向かって千年の間、「あなたはなぜ生きるのか」と問い続けるとしても、もし生命が答えることができるならば、「私は生きるがゆえに生きる」という以外答えはないであろう。それは、生命が生命自身の根底から生き、自分自身から豊かに湧き出ているからである。それゆえに、生命はそれ自身を生きるまさにそのところにおいて、なぜという問いなしに生きるのである」(M. Eckhart, *Werke*, I, hrsg. von Niklous Largier, Deutscher Klassiker Verlag, 1993, S.70-72)。

⁷ 存在への<驚き>の感覚は、ウィトゲンシュタインをハイデガーへと結びつける根本的感覚と言ってよいだろう。それはウィトゲンシュタインにおいて、ハイデガーと同様、前期から一貫してその哲学の底流にあり続けた感覚であった。「いまや私は、世界の存在に驚くという経験を、それは世界を奇蹟として見る経験である、という言い方で表わすことにしましょう」(LE.p.11)「たとえば、あるものが存在する、という驚きについて考えてみよ。この驚きは、問いの形で表現され得ない。そして答えは全く存在しないのである」(WW.S.68)。また、ハイデガーが、プラトン・アリストテレス以来「存在すること」を「作られてあること」(*Hergestelltheit*)とする制作的存在観によって西洋が支配されてきたことを批判していたように、ウィトゲンシュタインも、神をかつて世界の存在を制作した「職人」だとする見方を否定している。「人が、神が世界を創造したと言い、神は絶えず世界を創造していると言わないのは不思議なことだ。というのも世界が始まったということが、なぜ、世界が在り続けているということよりも大きな奇蹟でなければならぬのか。人は職人の比喩に惑わされているのだ」(D.S.206-207)。

その移行が、自らの前期思想、ひいては、その背後に根強く残存し続けていた伝統的な西洋形而上学との対決の痛苦を経た、ある種の倫理的回心に依拠しているということである。

ハイデガーの場合、確かに「存在への問い」こそが終始変わらぬ課題ではあったが、『存在と時間』の未完という事実が示しているように、1930年代半ばにはその思索の歩みの挫折を認めざるを得ない状況に陥っていた。その挫折の原因は、本人も述懐しているように、西洋形而上学の勢力圏内から未だ十分に思索が脱却できていなかったことにある(vgl.BH.S.328)。そして、その事情は彼の根拠論においても妥当する。1929年の論文「根拠の本質について」においては、根拠の本質は現存在の存在に求められている。すなわち現存在こそ「超越」という在り方によって、存在者に意味を与えるという根拠的性格を有しているのである。こうした現存在の存在を前期ハイデガーは「根拠への自由」と呼んでいる(vgl.WG)。このように、前期思想における根拠論にも、明らかに「主体性の形而上学」的発想が残存しており、後にナチズムへの加担へと導いていくような決断主義的傾向が読みとれる。

しかし、1930年代半ば以降の形而上学との対決の試みを経て、1946年の「〈ヒューマニズム〉についての書簡」では、「根源的倫理学」が語り出されている。ハイデガーは、エートスとは「居場所」(Aufenthalt)のことを意味するとし、この「居場所」について思索すること、すなわち存在の思索こそが「根源的倫理学」なのだと説く。その際、彼はヘラクレイトスに関する逸話を引き合いに出す——ある時ヘラクレイトスのもとに、「高名な哲学者との面会ゆえ、さぞかし超常的な体験ができるだろう」と期待しつつ人々が訪問してきた。ところが、この高名な哲学者はパン焼き竈で暖をとっていたのである。その見窄らしく、あまりにも日常的な姿を見て訪問者達は失望する。すると、彼らに対して、ヘラクレイトスは「ここにもまた神々がいるのです」と語った——ハイデガーによれば、このヘラクレイトスの言葉は、私たちがすでに住まう日常的な、ありふれた居場所にこそ、神が臨在していることを示しているのである(vgl.BH.S.352-357)。

一方、ウィトゲンシュタインの思索の歩みにおいても、前期思想から後期思想への劇的な変貌は、単なる言語理論上の立場の変更にとどまるものではなく、倫理的・宗教的な背景を持つものであることが、特に『探求』執筆時の日記帳(フォン・ライトによる遺稿目録の番号ではMS183に当たる)の発見によって、いっそう明瞭になってきている。奇しくもハイデガーと同時期の1930年代、『論考』の立場、ひいてはその背後にある自分自身の生を維持できないことをウィトゲンシュタインは明確に意識するようになる。具体的には、「日常の背後に厳密で普遍的な論理法則は実在する」という考えに表れているような、『論考』の内に未だ残存していた本質主義的・プラトニズム的傾向のうち、彼は理論を隠れ蓑にして「ありのままの生」に向き合おうとしない自己欺瞞を見出したのである⁸。後期思想の背後にある倫理的・宗教的態度を象徴的に示していると思われるのが、MS183中の以

⁸ 後期ウィトゲンシュタインの倫理的・宗教的背景に関しては、鬼界彰夫「隠された意味へ」『ウィトゲンシュタイン 哲学宗教日記』、講談社、2005年、を参照。

下の一節（1937年）である。

説明しないこと！ 記述すること！ お前の心を服従させよ、こんなに自分が苦しまなければならないことに腹を立てるな！ ……お前が病気なら、病気に合わせて過ごすのだ。病気であることに腹を立てるな。(D.S.183-184)

ここでは、「説明せず、ただ記述する」という後期思想のモットーが、そのまま自らの生き方への戒めと結びつけられている。ウィトゲンシュタインの後期思想を根本的に支えているのは、このように、ありのままの生を受け入れていく姿勢である——「心配は病気のようなものだ。私たちは心配を引き受けるしかない。最悪の態度はといえば、心配に逆らうことである」(VB.S.562)。

1939年のある日、かつての教え子であるドゥルーリーが自分は医者として不適格なのではないかという悩みをウィトゲンシュタインにうち明ける。ウィトゲンシュタインは、その翌日にドゥルーリーに渡した手紙の中で、医師という職業を選択したことも、実はひとつの「与えられたもの」(datum)であると説き、こう続けている。

いま大事なものは、君が置かれている世界の中で生きることである。君が住みたいと思う世界について考え、夢を見ることではない。人々の様々な身体的・精神的苦しみを見よ。それらは、君の近くにある。……君の患者を、苦悩している人間として、もっと間近に見なさい。そして、多くの人に「おやすみなさい」と言わなければならない幸運を、もっと喜びなさい。この幸運のみが、多くの人々が君を羨む、天からの贈り物なのである。……君は、ある意味で、人々の顔を十分に近くから見ていない、と私は思う。(PR.p.110)

こうしたウィトゲンシュタインの倫理的姿勢は、1937年における以下のような考察にもまた表れているように思われる。終生正義について悩み続けた者が、そのためにひどい人生に終わってしまったと仮定しよう。そうだとすると、自分は彼の生き方を嘲りはしないし、むしろ正しい生き方だと感じるとウィトゲンシュタインは言う。それは、その義を求める者が死後に報賞を受けるからではない。彼は、それとは別のものによって報われているのである。

しかし、この報賞が、死後の褒美だと私には考えられない。「この人は帰郷するに違いない」、こうした者について私はこう言いたい。／普通私たちは、(報賞や刑罰の)永遠性とは終わりのない時間の持続だと考える。しかし、それを瞬間と考えても全くかまわないだろう。(D.S.169-170)

こうした倫理観のうちにも、未来にではなく、今ここのあるがままの生の〈近さ〉のうち

へと「帰郷」し、そこに輝きを見出そうとする姿勢が読みとれる。ウィトゲンシュタインがその姿勢を最期まで貫いたことを、死が間近に迫っていた 1951 年における以下の発言は力強く示してくれている。

奇妙なことに、私はもう長くないと知っているにもかかわらず、「未来の生」については全く考えない。私の関心のすべては、依然としてこの生であり、かつ、依然として書くことが可能なこの手稿である。(PR. p.183)

——ほんとうは「なぜ」という問いに対する答えが欠けていることがニヒリズムなのではない。むしろ、そうした「なぜ」という問いに囚われ、在りもしない絶対的根拠を外部に探し回り、そのことによって脚下に在るものを忘却してしまっていることこそが、真のニヒリズムである。こうしたニヒリズムに本当に対処するには、端的なもの・単純なものへと立ち返ることが必要とされる。すなわち、存在者たちに対して *warum* を問いたただすのではなく、すでに与えられている *weil* としての根拠すなわち<深淵>としての根拠の<近み>に住まうこと、たとえば道端に咲いている花の存在や、苦しんでいる他者の存在に出会い直すようなことのうちに、根拠なき時代の倫理は根づくかもしれない。